

彷徨う二人へ

中村雄一

三十五年前の三月四日

浪人中の私と弟の

大学入学試験のその日

父は脳出血で倒れた

四年も浪人している私が試験に通るか

父は居ても立ってももられなかったに違いない

弟の一人も浪人中

もう一人の弟は高校生

ストレスが高じて

父は倒れた

十二時間後

父は

鼻や耳から血を流し

息絶えた

まだ一人前になっていない

三人の息子と

病弱の母を残して

どんなにか父は無念だっただろう

その後母は寝たきりになり

時折

父を殺したのは自分だと口走るようになった

母は うつ病と診断され

精神病院に入院させられた

その後母は結核を再発し

三方を鉄格子で囲まれた独房に移された
板張りの床に粗末な蒲団が敷かれ

冷房も暖房もない部屋の中で

母は一日中何を思っただけで過ごしていたのだろう

ある夜病院から電話があった

母が死んだのだ

私と二人の弟は病院へ行った

寒々とした独房の板張りの上に敷かれた

蒲団の中で

母は死んでいた

懐中電灯で顔を照らすと

医者が死亡確認の為に開けた片目が

私の目をじっと見詰めていた

恐ろしい一時であった

その目を

私は そっと閉じてやった

父の死から三十五年

私の二人の息子は社会人になり

私自身も

年金生活が目の前に迫っている

だが私の心は

決して安らかではない

父と母の二つの魂が

未だに成仏出来ずに

暗闇の中を彷徨っているからだ

私は今

自分自身の命にかけて

二つの生き物を父や母の元に送り届ける

地獄の犬 ドーベルマン

冥界の猛禽 梟

これが

私が送り届ける二つの生き物だ

ドーベルマンは父の足元に付き添い

二人に襲いかかる邪悪な獣に牙を剥き

喰り

飛び掛かって道を開いて行くだろう

母の肩に止まった梟は

丸くて大きなその目で

暗黒の空に満ちた悪霊を睨み

時折羽撃いて

その鋭い嘴と共に

相手を威嚇する事だろう

こうして

ドーベルマンと梟に守られた

哀れな二つの魂は

ようやく極楽へと辿り着く

この時私の目は閉じられ

深い眠りへと落ちて行く

二度と覚めない深い眠りへと

例え

私の魂が地獄へと落ちて行くこうとも

学校

四十年前に卒業した小学校を訪れた
懐かしい一本の楠の大木は

微かな風のなかに

ひっそりと佇み

足元の砂場を

暗い影でおおっている

小さな砂山は半ば壊れ

スコップがころがり

そこから広々と

夏休みの校庭が横たわる

この静かな沈黙のなかに

甦がえる思い 遙かな昔の記憶

はつきりと聞こえてくる声

四十年前

この小学校の近くに闇市があり

大勢の大人や子供達が生活していた

そのなかの一人によっちゃんがいた

空襲でみなし児になった彼は

病気がちのおばさんと ただ二人で住んでいた

あまりにも貧しいので

よっちゃんは学校へも行けなかった

朝になると

闇市の子供達は皆元気よく

「行ってきます」

そう言って学校へ行く

途中でよっちゃんとお出くわす

彼は新聞配達をおえての帰り道

だけど屈託もなく笑いながら手を振って

僕らを見送る

そんなに朗らかで元気なよっちゃんが

ある日風邪をひき

崩れるように寝込んでしまった

容体が急変したので

近所の人々が集まってきた

踏み倒せばいいということ

医者も呼ばれた

そのつもりで医者も来た

が、手遅れであった

高熱にうなされながら

最後に目を見開き 言った言葉

「行ってきます」

そして死んだ

子供の一人が叫んだ

「よっちゃんは学校へ行ったんだ」

おお

四十年過ぎた今も聞こえる

湖面に湧き立つさざ波のように

私の魂を揺さぶる

あの少年の声

過疎

その天草の集落は四十年前
すでに過疎の村落として存在していた
在校生徒七人の小学校の分校が一つあり
一人の先生が校長を兼ねて
家族づれで赴任してきた
一町歩の田んぼが集落の中心部にあり
そこから取れる米がすべてであり
あとは各家が所有する
僅かな畑があるだけであった
その集落へ
ぼくら四人の若者が
キャンプにやって来た
来てから三日目
集落の青年が
今日は魚が獲れたからと言って
獲れた魚の刺身とどぶろくを持ち
先生も引きつれて
ぼくらのキャンプへやって来た
夕方からささやかな宴会が始まった
彼等の話からすると
小学校の男女は
中学校へ行く年になると
となりの中学校の寮に入り三年を過ごし
卒業と同時に東京や大阪へ就職して行ってしまい
この村へ帰って来る者は一人もいないという
後に残された親はどうなるだろう
二親の行く末を心配して村に残った男が三人いた

そのうちの二人は三十六才で未だに独身である

のこる一人が今目の前でどぶろくを酌み交わしている三十才の青年である
彼も又親の面倒を見るため村に残り

そのための独身なのである

あと十年経ったらこの村はどうなっているだろう

子ども達は一人もいなくなり

分校も廃校となり

三人の独身青年は

それぞれ四十六才になり

いちばん若い青年ですら

四十才になっている

しかも独身で

年老いた両親の面倒を見ているのである

それを思うとぞつとする

どぶろくを持ってきた三十才の青年は

どぶろくを飲みながら

そう言った

暫くしてテントから半身を出し夜空を見上げると

こぼれるような星の光で

手元も明るいほどであった

それから四十年が過ぎた

新聞の小さな記事で

その集落を貫通する道路が完成したことを知った私は

居ても立ってもおられなくなり

次の日曜日

車で天草めがけて出発した

二時間ほど走ると

五〇メートルほど海に突き出た岬と

岬の先端に空に向かって一〇メートルほどの高さで立っている

一枚岩が見えてきた

いよいよ集落の入口にさしかかったのである
スピードを落とし

村の中心部へ入っていったが

人影どころか人家さえどこにもなく消えていた

ここがかったの田んぼの跡らしき所は道路が左右に大きく膨らんでいる場所であろうと推測された

道の両側のふくらみは

そこに車を一たん止めて休憩する場所になっていたのだった

そんなことより

私は三人の青年のことを思った

両親の面倒を見るため

この集落へ残った三人の青年のことを

生きているとすれば一人は七十才に

残りの二人は七十六才になっている筈だった

彼らも

もう死んだであろう三名の両親も

東京や大阪へ就職して行った多くの子ども達も

今はどこでどうしているのやら

私には分らない

海を見ると数羽のかもめが海の上に羽根を休め

山の方には大きな柿の木にカラスが一羽止まっている

私は目頭が熱くなった

私は車のギアをドライブに入れ

アクセルを静かに踏んだ